



こどもへの読み聞かせ雑考

幼児教育学科 専任講師 小野智明

私ごとで恐縮だが1歳になる娘の近頃のマイブームは絵本だ。中でもお気に入りなのが松谷みよ子氏の『いないいないばあ(童心社)』。読んでやると、大好きなおしゃぶりも取り落とし、手を伸ばしてかぶりつく。中身は、動物たちが「いないいないばあ・・・」と登場する至って単純なものなのだが、何でも絵本界のミリオンセラーナンバー1だそうで、発行数が400万部を超えているとか。余談だが、400万部がどれだけすごいかというと、戦後、小説の中で最も発行部数が多いのが『世界の中心で、愛を叫ぶ(小学館)』で、その数321万部だそうだから、刊行時期の違いはあるにせよ、“セカチュー”を抜いている本、という訳だ。

この本の作者である松谷みよ子氏は現代きっての児童文学作家だが、『いないいないばあ』のようなほのぼのとした作品ばかりでなく、戦争と平和、環境問題や死後の世界を扱った著作も多い。また最も有名な「モモちゃん」シリーズでは、両親の離婚や父親の死をもテーマになっているのをご存知か？無邪気な子ども目線で描かれているが故に、より一層悲しみや痛みがリアルに伝わってくる物語なので、ぜひ一読されてみてはいかがだろう。

ところで、一般に児童文学というもののほのぼのしたものをイメージしがちだが、童話には元来寓意性(何かにかこつけてそれとなく道徳的な教訓や社会常識などを伝える)が含まれているものが多い。そして原作のなかには残酷的な内容が含まれているものもある。日本の作品だと『かちかち山』などだ。これはお婆さんを汁にしてしまった狸への兎の復讐劇だが、悪狸を懲らしめようという寓意に加え、婆汁や火傷に辛子を塗りつける諸々のシーンに残酷さがある。今では倫理的な観点から表現をソフトに改稿されているものの、一見無邪気なメルヘンの中に社会の機微や人間本来の闇のような部分が見え隠れし、子どもたちは本を通してそれらを学んでいくのかもしれない。

そう考えると、物語の背景にある現象や教訓を知らないで表面的に読む読み聞かせでは薄っぺらな気がしてくるし、何よりもいろいろ知っておくと、娘とのコミュニケーションタイムが楽しくなるなあ・・・と、思ったりするのである。そんなちょっとした思いがあることもあり、児童文学作品や童話をちゃんと読んでみようかな・・・などと思う今日この頃である。

目次

こどもへの読み聞かせ雑考	幼児教育学科 専任講師	小野智明	1
地名への執念 一吉田東伍『大日本地名辞書』の配架を祝う— 二次元の世界から…。	総合文化学科 教授	西山秀人	2
私の好きな本	総合文化学科 准教授	佐藤 厚	3
本学教員の新刊著作	幼児教育学科 専任講師	島崎あかね	4
本と私	幼児教育学科 1年	澤井紀子	5
子どもと絵本	幼児教育学科 2年	葛綿悠子	5
図書館がある生活	総合文化学科 1年	目黒幸恵	6
図書館実習を体験してみよう	総合文化学科 2年	丸山 藍	6
図書館ガイド			7
図書館ニュース 第10回七夕文学賞			8

CONTENTS

こどもへの読み聞かせ雑考	幼児教育学科 専任講師	小野智明	1
地名への執念 一吉田東伍『大日本地名辞書』の配架を祝う— 二次元の世界から…。	総合文化学科 教授	西山秀人	2
私の好きな本	総合文化学科 准教授	佐藤 厚	3
本学教員の新刊著作	幼児教育学科 専任講師	島崎あかね	4
本と私	幼児教育学科 1年	澤井紀子	5
子どもと絵本	幼児教育学科 2年	葛綿悠子	5
図書館がある生活	総合文化学科 1年	目黒幸恵	6
図書館実習を体験してみよう	総合文化学科 2年	丸山 藍	6
図書館ガイド			7
図書館ニュース 第10回七夕文学賞			8

地名への執念

一吉田東伍『大日本地名辞書』の配架を祝う一

総合文化学科 教授 西山 秀人

私の専門は国文学、とりわけ『源氏物語』に代表される平安時代の文学である。学生時代は決して勤勉とはいえなかったが、それでも課外活動として行われていた「枕草子研究会」なる勉強会に参加し、諸先生方からこの上ない学恩を授かった。

『枕草子』というと冒頭の「春はあけぼの」があまりにも有名であるが、この作品の骨格をなしているのは、たとえば「山は 小倉山 鹿背山 三笠山…」のように地名や事物の名を列挙する類聚章段と呼ばれる文章である。類聚章段について調べる場合、まずは和歌関係の辞典・索引類にあたって用例を博捜することが基本となるが、厄介なことに『枕草子』は先行用例の乏しい珍名奇名を数多く含んでいる。「清少納言はどこからこんな地名を探し出して来たのだろう」と行き詰まることもしばしばであった。

当時はコンピュータなどという便利なツールがなかったので、分厚い本を1ページずつめくってはひたすら用例を探し求めることも珍しくなかった。ある時、そんな私の姿を目にした指導教授が「『大日本地名辞書』を見てごらん。何か参考になるかもしれん」とアドバイスをしてくれた。さっそく図書館に向いて『大日本地名辞書』全巻を借り出したが、何分にも明治時代の本であるからいかにも文体が古めかしい。辞書を頼りに何度も読み返さないといけない内容すら理解できなかった。よほど返却してしまおうかとも思ったが、せっかく先生が薦めてくださったのだからと、我慢して本文と向き合った。すると、既存の研究書ではほとんど触れられていなかった地名についての由来が、きわめて的確に記述されていたのである。閲覧室であるにもかかわらず「これだ！」と手を打って歓喜した記憶が今でもよみがえってくる。以来、地名に関する考察を行う場合は、出来る限り『大日本地名辞書』にも目を通すよう心がけている。

前置きがずいぶん長くなったが、このたび附属図書館に『増補 大日本地名辞書』全八巻（新装第二版 平成15年 富山房）が配架される運びとなった。『大日本地名辞書』は越後出身の歴史学者、吉田東伍（元治元年1864—大正7年1918）が足かけ13年をかけて完成させた全国地誌である。明治33年（1900）から同40年（1907）にかけて順次刊行され、その文字数は千二百万字、取り上げられた地名は四万千項目に及ぶ。初版の出版祝賀会では会場の一角に東伍自筆の原稿が置かれていた模様で、その高さは三人分の身長

に匹敵するほどであったという。東伍亡き後、著者の遺稿を増補するとともに、日本の誤字を訂正し、誤記に補注を加えるなどしたものが増補版である。歴史地理研究における基本図書であり、郷土資料としても十分活用できる内容を備えているが、何分にも高価であるため（全巻揃いで16万8千円）、本学では長らく配架されることがなかった。

ここで本書の内容を少しく紹介してみたい。私の自宅は青木村に比較的近いので、同村にある田沢温泉の項を挙げてみよう。

田沢 今村松、奈良、沓掛などと合せ、青木村と改む。田沢の鉱泉は那須湯と称し、硫黄性三源あり。子持湯、仙人湯、熱百五度、内湯、九十九度、客舎数戸あり。上田を去る四里、海面を抜くこと二千二百余尺の山腹に居る。旗鋒山其西に峙つ。

信濃なる那須の御湯をもあさむはや人をはぐくむ病やむべく〔歌枕、類聚〕無名 法師

上記の和歌は、鎌倉後期に編まれた私撰集『夫木和歌抄』に「しなのなる なすのみゆをも あむさばや人をはぐくみ やまひやむべく」（12495）として採られているが、『大日本地名辞書』を目にするまでは下野国の那須の湯（栃木県的那須湯本温泉）を誤り伝えたのであろうと軽く考えていた。むろん、その可能性が高いのではあるが、もしも田沢温泉が古くから那須湯と呼ばれていたことが立証されれば、初句「しなのなる」は「しもつけや」の訛伝などとは即断できなくなるだろう。

『大日本地名辞書』は郷土を知る上で多くの示唆を与えてくれる強力なデータベースであり、昭和になって編まれた『角川地名大辞典』や平凡社の『日本歴史地名大系』（ともに図書館に配架）には漏れてしまった貴重な情報を数多く含んでいる。地名の由来や地理地文について調べるならば、これら三種の辞書を相互補完的に活用するとよいだろう。

吉田東伍の伝記については千田稔『地名の巨人 吉田東伍—大日本地名辞書の誕生—』（角川書店 平成15年）に詳しいので、興味のある方は一読をお薦めしたい。なお、新潟県阿賀野市に吉田東伍記念博物館がある。

二次元の世界から…。

総合文化学科 准教授 佐藤 厚

誰にも、絵本にまつわるエピソードが一つ二つはあると思う。幼き頃、父や母、祖母、幼稚園や保育園の先生に読んでもらった数々の絵本。暗記するほど、絵本の内容を知っているのに、あのわくわくドキドキ感を何度も体験したくて、繰り返し読んでほしいとせがんだ記憶がある。絵は動かないのだが、読み手の声のトーンや顔の表情、ページをめくる瞬間、そして躍動感溢れる絵が、見ている側の想像力を高め、その絵を自然に動きのあるものへと変化させていく。不思議で面白い。人に読んでもらっている年齢の時は、絵本の時間が早くやって来ないかと待ち遠しかったものだ。そのうち、自分で読めるようになってくると、一通り読む楽しさと、クライマックスシーン(自分のお気に入りのページとでも言おうか…)を何度も読む。いやその前のページやその前から…。そうやって時の経つのも忘れ、絵本の世界に引き込まれていった。

日本の昔話や海外の童話にも定番の楽しい絵本が多い。普遍的なテーマ「人生観、勇気、愛、友情、家族、躰、教育観、死生観」などをもとにした作品は、時代を超え様々な作家や研究者達によって、その絵や文字の表現こそ違えども現代に伝え続けられている。様々な解釈がされてきたが、友情や団結をもとに勧善懲悪物語の一例として「桃太郎」がある。犬、猿、雉といった異なるパーソナリティーが協力し合い鬼退治となる。桃太郎が、それぞれと出会う時に「きびだんご」の存在は欠かせない。この場面は「桃太郎さん、桃太郎さん♪」でおなじみ、文部省唱歌(1911年「尋常小学唱歌」作詞者不明、作曲・岡野貞一)にもなっている。明治時代初期までは桃を食べて若返ったお爺さんとお婆さんの間に桃太郎が生まれたという回春型の話であったが、明治20年に国定教科書に採用される際に現在の話に定着した。室町時代に発生したといわれる「桃太郎」だが、各地で長い年月を経て諸説飛び交う現在、当の作者はどんな気持ちでこの状況を見つめているのだろうか。

さて、最近の友情をテーマにした絵本の中に「おれたち、ともだち！」(作：内田麟太郎 絵：降矢なな 偕成社)シリーズがある。第一巻「ともだちや」。キツネが新しい商売を思いつき、「ともだちや」を始める。「ともだち一時間100円」。そこへ、オオカミが「おい、キツネ」とトランプの相手としてキツネを呼び止める。しばらくトランプで遊んだ後、キツネがお代をもらおうとするとオオカミは「お代だって！お前は、ともだちから金をとるのか。それが本当のともだちか！」「ほ、本当のともだち？」「そうだ、本当のともだちだ。おれはともだちやなんか呼んだんじゃないぞ。」そういえば、オオカミは、「おい、キツネ」とよんだのでした。(中略)オオカミはミニカーをくれました。「これを、もらってくれるか？」「ありがとう、オオカミさん」

オオカミのいちばんだいじなたからものでした。(P24～29より)幼児はこのやりとりを見て、ほっとしたような、うれしいような…心の想いが顔に表れる。そして、この場面をオオカミやキツネになって皆で言う。次に、立って動きながらやってみる。絵本が劇あそびとなって立体的に動き出す瞬間である。自分で考えてとどんと動く子もいれば、友達を見てマネから始める子もいる。子どもたちは色々な表現を互いに楽しみ共有し認め合う。きびだんごと鬼退治のような条件はないが、「友達を大切にすること」を言葉で理解することと同時に体験的に学べる絵本である。

優れた絵本は様々な分野に形を変えて楽しませてくれる。「あらしのよるに(全7巻+特別編)」(作：木村裕一 絵：あべ弘士 講談社)はアニメ映画や日本の数劇団が舞台化した。テーマ曲のCDやアニメのDVDも発売。その後、漫画版さらには「あらしのよるに 恋愛論」まで出版された。「葉っぱのフレディー」(作：レオ・バスカーリア 訳：みらいなな 画：島田光雄 童話屋)も絵本が話題になるや、キッズミュージカルとして舞台化され、2010年には本場ニューヨークでの公演を目指すという。絵本もここまで多様化されれば本望か…。ただ、今話題になっている絵本は、友情や命等の人間関係に関わるものや環境問題といった現代の殺伐とした社会問題を浮き彫りにしているものが多い気がする。世相が文学や芸術に反映することは、今も昔も同じようである。話題の絵本を再度開く。以前読んだ時とはまた違った感覚がある。アニメ映画や舞台化されたものも確かに楽しかった。しかし、同じものなのに読む度に新たな感覚を与えてくれる絵本は、やはり不思議で面白い。

子どもたちと「絵本から劇あそびへ」の表現遊びや「親子の読み聞かせ講座」等の活動を通じて絵本の効果は、本好きになるきっかけや子どもの言語能力・表現能力を発達させ、家族間においては親子のコミュニケーション、双方の情緒安定にも役立つことがわかる。また、幼稚園や保育園等では、楽しい絵本の時間を皆で共有することで相互理解への心を育てる。他にも様々な効果はあるだろうが、絵本が情操教育の一端を担っていることは確かである。

秋も深まる頃、故郷に戻った。探し物ついでに、納戸の奥にセピア色に変色した絵本を見つけた。少しカビ臭いその絵本をそっと開いてみる。懐かしさと共に、当時の古い家の様子が思い浮かぶ。炬燵にあたりながら、布団の中で、お昼寝の前に…絵本を読んでくれていた母や、今は既に聞くことができない父や祖母の、やさしく穏やかな声が聞こえてきた…。

私の好きな本

幼児教育学科 専任講師 島崎あかね

私は子どもの頃から外で身体を思いきり動かして遊ぶことが好きだったので、家の中でじっくりと本を読む時間は少なかったかもしれない。ただ、姉が2人いたので家の中には絵本を始め、童話、歌の本など比較的多くの本が家にあったように思う。その中で大人になった今でも子どもの頃に読んだ本で忘れられないものがある。「おおきい1年生とちいさな2年生」「ちいさいおうち」「いやいやえん」「おばあさんのひこうき」などはストーリーの大筋を覚えているし、姪が持っているこれらの本を懐かしく読むこともある。中でも「ちいさいおうち」は大好きな絵本で、外国の絵本らしく色彩も鮮やかで印象に残っている。この本は、1942年にバージニア・リー・バートンが書いた絵本で、すでに60年以上も愛されていることになる。ストーリーは、田舎の小高い丘に建てられた頑丈だけれどもちいさいおうちは、季節の移り変わりを周りの自然から感じながら穏やかに暮らしていたが、年々おうちの周りが開発されて町ができ、いつの間にか田舎が都会へと変わりちいさいおうちはビルに囲まれてしまう。住む人もいなくなり荒れ果てていくおうちを、やがて最初におうちを建てた子孫が田舎の小高い丘におうちを移し、ちいさいおうちは再び自然に囲まれた中で幸せに暮らすことができた…という、とても奥が深いものだった。現代の都市開発や環境保護に通じる部分も多く、子どもだけでなく大人からも人気が高い絵本の一つだと思う。数年前、何気なく立ち寄った書店でこの本を見つけたとき、すぐに手にとりそのまま購入して今では私の自宅の本棚に並んでいる。そして時々本棚から取り出しては眺めている。

昨年、保育園への実習訪問で訪れた新潟のある保育園の園長先生と絵本の話をしたことがある。その園では、子どもたちにもたくさんの絵本を読んで欲しいと願い、園にある絵本を毎週金曜日には子どもたちに貸し出して家でじっくり読めるように配慮されているとのことだった。園長先生も私と同じ「ちいさいおうち」が大好きで、今でも読んでいらっしやるとお聞きした時には、子どもの頃にそれほど多くの絵本を読んでいない私と、日常的に読み聞かせなどで絵本と関わることの多い園長先生と同じ絵本が好きだという共通点を見い出してとても嬉しくなったのを覚えている。

私はこの短大に来ることになってから、書店での行動が大きく変わったように感じる。これまでは体育人間らしく(?)スポーツ関連の書籍や雑誌、健康に関する書籍のところで多くの時間を費やしてきたが、今ではまず児童書・絵本のコーナーを一通り回って、気になる絵本を手にとって見るが多くなった。そして絵のかわいさやストーリーに込められたさまざまな想いを感じ取りながら、癒されたり優しい気持ちになっているように思う。絵本は小説と違い、比較的短時間で読むことができるので、これからも楽しい絵本やかわいい絵本、ためになる絵本を見つけて、絵本と触れ合う時間を多く持ちたいと思っている。そして願わくば皆さんにも、大人になってからも読み続けられる「私の一番好きな絵本」を見つけて欲しいと思っている。



2009年 本学教員の新刊著作



(最近発行された単独書・共著・分担執筆) 著者の五十音順

- | | | | | | |
|------------|---------------------------------|-----------|---------|--------------------|--------|
| * 松田幸子学長先生 | 『愛しながらの闘い』(ぎょうせい) | 2009年5月出版 | 1,429円 | ISBN:9784324800140 | (単独書) |
| | 『自己自身をみつめる』(田辺印刷) | 2009年7月出版 | 非売品 | | (分担執筆) |
| * 長田真紀先生 | 『日本思想史辞典』(山川出版社) | 2009年4月出版 | 8,925円 | ISBN:9784634622104 | (項目執筆) |
| | 『日本史有名人 おやじの背中 (新人物文庫)』(新人物往来社) | 2009年7月出版 | 700円 | ISBN:9784404037220 | (分担執筆) |
| * 西山秀人先生 | 『王朝文学と交通』(竹林舎) | 2009年5月出版 | 15,000円 | ISBN:9784902084870 | (分担執筆) |



本と私

幼児教育学科1年 澤井 紀子



私は、いままで本を読むという習慣がありませんでした。小学校のときは、何回か図書館に足を運びましたが本を読むことが目的ではなく、本を借りてスタンプを増やすことに夢中になり、真剣に本を読むということはありませんでした。中学生になってから、少し本に興味を持ち始め、気になるタイトルの本は借りて読んでいました。しかし、分厚い本を借りたときは途中で読むのが嫌になり最後まで読まないで返してしまうことが多かったです。高校生のときは、図書室に行く機会が減り一回も借りずに卒業してしまいました。

今、考えてみると、本に興味を持って実際に最後まで読んだことのある本は数冊しかありません。そこで私は、自分に合った本を探すようになりました。分厚い本は、途中で断念してしまうと思ったので話の短い本を選んだりしました。一冊の本を読み終えると、その物語の回想をしてみたり、感動して泣いたりなど本のおもしろさを感じます。

また、本に興味を持ち始めると、自然に本屋に行く

機会が増えるようになりました。小説だけではなく、エッセイや絵本なども読むようになりました。短大に入学してからは、絵本を読むことが多くなり、たくさんの絵本を手にとり「この絵本は3歳児向けかな？」などと考えながら読みます。

夏休み中に、初めての教育実習で絵本の読み聞かせをしました。私が子どもたちに読み聞かせたのは『そらめくんのベッド』という絵本です。この絵本はたくさんのシリーズがあるので子どもたちも楽しめる絵本だと思いこの絵本を選びました。子どもたちは私が絵本を読み始めると真剣に絵本を見つめ、指をさして話に共感したり、わくわくした表情で絵本の世界を楽しんでいました。

保育者は、子どもたちに絵本の面白さであったり、楽しさを教え、本を好きになるきっかけを作っていくことが必要だと思います。そのためにもたくさんの絵本を読み、子どもにいろいろな種類の絵本を読み聞かせしていきたいです。



子どもと絵本

幼児教育学科2年 葛綿 悠子



「ごほん、始めるよ。」小さな私にとって、一日でいちばん大好きな母の声でした。

絵本が好きな母の影響で、幼稚園教諭を目指すずっと前から私にとって絵本は身近な存在でした。毎日、夜寝る前に絵本を母に読んでもらうことが日課で、とても楽しみでした。

そんな絵本の中で特に気に入っていたのが、『しろいうさぎとくろいうさぎ』です。私だけではなく読んでくれていた母や一緒に見ていた弟や妹も大好きな絵本でした。人を大好きだという気持ち、大好きだからずっと一緒にいたいという気持ちを、母は私たち家族、特に私や弟妹に重ね合わせて読んでくれていました。ガス・ウィリアムズが描いたかわいらしいうさぎの絵も大好きでした。

小学校に入学し、自分で絵本や学校の図書館で借りた児童書などを読めるようになってからも寝る前の絵本の時間は変わらずにありました。まだ、下に弟妹がいたこともあると思いますが、何より私自身が読んでもらうことが大好きだからです。確かに今まで読んで

らっていた本を自分で読めるようになる喜びもありました。しかし母に読んでもらうことの安心感や心地よさは自分で読む際には味わえません。

短大に入学し、本格的に幼稚園教諭を目指して勉強をし始め子どもに向けて絵本を読む機会が増えました。初めは読むことやページをめくるタイミングに注意することなどで精一杯になり子どもたちの表情を見る余裕はありませんでした。しかし、初めての教育実習の際、「先生、今日は何の絵本読んでくれるの？」と子どもが声をかけてくれました。その時、小さい頃母の絵本の時間を楽しみにしていた自分をふと思い出しました。

私は母のおかげでたくさんの絵本と出会うことができました。短大を卒業し、「先生」として子どもの前に立つようになった時、子どもが絵本の時間が大好きになるように、たくさんの素敵な絵本との出会いがあるように、私にとって母がそうであったように、子どもと絵本をつなぐ架け橋のような存在になりたいです。



図書館がある生活

総合文化学科1年 目黒 幸恵



皆さんは、図書館が登場する物語を一つ挙げるとするならば、何を挙げるのだろうか。私は、ジブリの「耳をすませば」をまず最初に挙げる。主人公の月島雫が、借りた本の貸し出しカードに必ず天沢聖司という名前があることに気づき、気になっていく。そんなことから始まる映画なのだが、今ではこの貸し出しカードを使っている図書館は非常に少なくなっているのではないかと思う。何故なら、個人情報というものに今の世の中の人々が敏感になっているからだ。この映画の例は、めずらしいのかも知れないが、本を通して、人との出会いやつながりが出来ることは、図書館が持つ魅力の一つであると思う。本屋さんでは、どうしても売り手と買い手という面が出てきてしまい、本一冊を介しての人との交流というものがなかなか難しいと思うからだ。

この様に、図書館という場所を意識するようになっていったのは、図書館と自宅との距離が近かったという環境も影響していると思う。

私は、幼少の頃から本好きだった訳ではない。思い

返して見れば、絵本を読んだ記憶があまりなかった。だが、小学校中学年頃だったろうか。図書館の企画する五十冊読書運動に参加し、特設コーナーに設けられている児童書を読むようになった。それから、私の世界は広がったのだ。学校から帰るとすぐに図書館に行き、閉館時間まで借りたい本を探す。これが小学校時代の日課になり、その頃は本当に読書漬けの日々であった。そこに山があるから登るのだという言葉と同じく、私は、そこに本があったから読み始めたのだ。本との出会いは偶然ではなく、必然であったと思う。

そんな私がよく通っていた図書館で、夏休みに実習を行わせて頂くことが出来た。普段とは違うカウンターの中から見る図書館は、とても新鮮だった。一冊の本を介して母と子のつながりがあり、本を介して利用者と職員の間にも会話が生まれた。私は図書館を自分の世界に入るための手段として利用していたが、周りには様々な目的のために来る利用者であふれていたのだ。私は、この利用者たちが横につながっていく図書館が増えていったらいいと思う。



図書館実習を体験してみて

総合文化学科2年 丸山 藍



私は司書資格をとるために日々勉強していますが、いくら知識として学んでも実際に利用者と触れ合い、業務を体験してみないと、何を求められているのか、司書にとって何が大切なのか、分からないことが沢山あると思いました。そのような理由から、この夏休みを利用して地元の図書館で実習をすることを決意しました。

最初に「実習」と聞いて私がイメージしていたものは図書館の主な業務であるカウンターでの貸出や返却といった作業でした。短い期間の実習なので、レファレンスや製本などは体験できないだろう、学生にそんな大切な作業をまかせるわけがない、と思いこんでいました。しかし、ある朝いきなり「丸山さん、利用者から質問が来ているから調べてきて」と言われました。まさか、そのように指示されると考えもしなかった私は戸惑い、とにかく慌てて辞典のコーナーまで行って、周りにいた職員さんに聞きまわりながら、何とか答えになりそうな文を見つけ出しました。レファレンスのことは授業でも勉強していましたが、実際にやってみると、この作業は想像以上に難しかったです。この図

書館に寄せられる質問の大半がこの地域に関することばかりで、ただ分類法を知っているだけではなく地域の地名や歴史にも詳しくないといけなかったと感じました。

この実習中には講演会の司会や会場作り、受付や資料作成なども体験することになりました。これも、ある朝いきなり「今日、司会やってね」と頼まれ、とても驚きましたが「良い経験になるから」と言われ、挑戦してみることにしました。しかし、司会の原稿などは一切無く、一から私が作ることになり、練習もしないまま本番をむかえることになりました。夏休みの子供むけの企画でとても緊張しましたが、終わった後には参加者の拍手と職員さんから「良かったよ」という言葉をもらい嬉しかったです。

普段、通いながれた図書館でも自分が利用している立場では見ることの出来なかった図書館の現状を知ることができました。本棚のスペースや書架の配置なども、この図書館独自の工夫がなされているなど、知識だけでは分からなかった部分を体験することができました。この体験を生かし、今後も頑張っていきたいです。

図書館ガイド

知識探索サイト ジャパンナレッジ クラシック

JapanKnowledge Classic

百科事典・辞書・ニュース・学術サイトURL集などを集積した日本最大の知識データベースを一括検索！

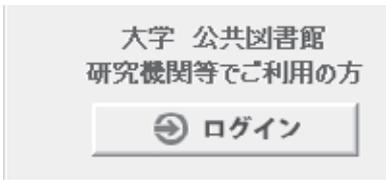
★ご存じですか？ 当短大では、データベース「ジャパンナレッジ JapanKnowledge 」が利用できます！

<http://na.jkn21.com/top/corpcdisplay> (図書館ホームページからもリンクしています。同時アクセス1回線)

校内LANに接続されているPC限定でログインできる、とても便利なデータベースです。

2009年4月からさらに検索できる情報が多くなり、外部URL参照など、知識探索ワールドが広がりました。

★まずはログインしてから使いましょう



★使用後は忘れずにログアウト



★たとえば・・・

卒業研究で「発達障害」のことをテーマにしたとき

8つの分野に分かれています。
チェックボックスをはずしたり
付けたりして、コンテンツを選べます。

① ここにキーワードを入れて検索

② クリック

③ クリック

④ 検索結果をクリックすると本文画面が現れます

⑤ 関連キーワードも表示され、クリックできます

辞典・事典系: 「発達障害」の検索結果 9件見つかりました。

- はたつしよがい【発達障害】(デジタル大辞泉見出し自体)
子供の発達途上において、生体の機能の一部が成熟しないなどでとまっている状態。広汎性発達障害・学習障害・注意欠陥多動性障害(ADHD)・知的障害・発達性言語障害・発達性協調運動障害などがある。…(続きを読む)
- 発達障害【メンタルヘルス】(Developmental Disorder)(現代用語の基礎知識見出し自体)
自閉症、アスペルガー症候群、学習障害、注意欠陥多動性障害など、乳幼児期にもつらみられる発達の障害のこと。(1)全般的な知的障害はない、(2)特定の課題の解決ができない、(3)集団行動ができない、(4)…(続きを読む)
- 発達障害【心理学】(developmental disorders)(情報・知識 imidas見出し自体)
幼児期、児童期および青年期から、精神的あるいは身体的機能に障害がみられ、学習や運動機能、対人関係機能、自立した生活能力の発達に制限がみられる障害の総称。アメリカ精神医学会(APA)発行のDSM-4(種)…(続きを読む)
- 発達障害【育児】(現代用語の基礎知識見出し自体)
発達障害とは、自閉症、高機能自閉症(アスペルガー症候群)、注意欠陥多動性障害(ADHD)、学習障害(LD)、これらに類する脳機能障害の総称である。注意欠陥多動性障害とは、認知、概念化、言語、記憶、注意…(続きを読む)

Developmental Disorder

自閉症、アスペルガー症候群、学習障害、注意欠陥多動性障害など、乳幼児期にもつらみられる発達の障害のこと。(1)全般的な知的障害はない、(2)特定の課題の解決ができない、(3)集団行動ができない、(4)コミュニケーションが十分にとれない、という共通点がある。2004年に発達障害者支援法ができて、早期発見と教育的支援の環境が整いつつある。なお、広汎性発達障害とは、自閉症、アスペルガー症候群とは診断しにくい類似した症状を示す障害をいう。

Knowledge Searcherを使用する

医療・健康

- > メンタルヘルス
- > メンタルヘルスの基礎知識
- > 発達障害
- パーソナリティ障害
- 反社会性人格障害
- PTSD(外傷後ストレス障害)
- 発達障害
- 適応障害
- 全般性不安障害
- 社会恐怖(社会不安障害)
- 至高体験
- 強迫性障害

図書館 ニュース

第10回 七夕文学賞

◆恒例となりました七夕文学賞も、
本年は左記のみなさんの作品が受賞となりました。

優秀賞

短歌 総合文化学科 二年 中島 祥

故郷への思いが募るせせらぎに希望をくれし君堂かな

佳作

俳句 総合文化学科 一年 大井田 理絵

雨上がり虹を見上げる暇もなく

佳作

俳句 総合文化学科 一年 大久保 真弓

網戸越し聞こえてくるは蝉の声

佳作

短歌 総合文化学科 一年 青柳 彩花

天の川いく年月も誰がために苦しい想いは蝶の舞う夢



※選考・添削は、大橋敦夫図書館長

編集後記

a postscript by the editor

慣れ親しんだ雑誌が次々に消えていきます。『小学五年生』『小学六年生』(小学館)、専門分野では、『国文学解釈と教材の研究』(学燈社)『言語』(大修館書店)など。

年鑑類も、どんどん休刊になっています。『信毎年鑑』(信濃毎日新聞社)『国語年鑑』(国立国語研究所)など。

インターネットがあるから大丈夫、とは言いきれない、冊子体のもつ良さが失われていく状況です。

大橋敦夫

みすず

第36号

上田女子短期大学附属図書館報
2009.12 発行

編集：上田女子短期大学図書館紀要委員会

発行：上田女子短期大学附属図書館

〒386-1214 長野県上田市下之郷乙620

Tel : 0268-38-6019 Fax : 0268-38-6019

Ex-ℓ : lib@uedawjc.ac.jp